広報 すぎなみ
Suginami
みどり豊かな　住まいのみやこ
12/15
令和5年（2023年）
No.2368

野鳥を探して自然を見つめる。

野鳥写真家・西村眞一さんは野鳥観察歴47年。善福寺公園をメインフィールドに、野鳥の解説などを通して自然の尊さを伝える活動に力を入れています。今号では、西村さんが野鳥観察を始めたきっかけから現在に至るまでを伺うとともに、野鳥観察のポイントを教えていただきました。

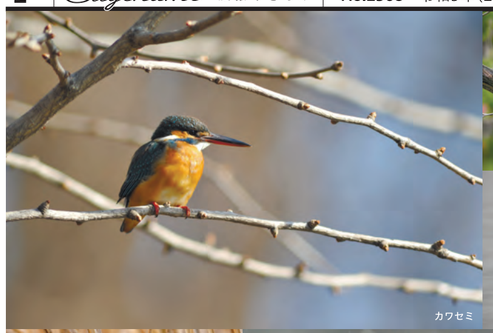
特集
人
すぎなみビト

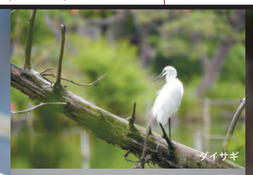
野鳥写真家 西村 眞一

〒166-8570 杉並区阿佐谷南1-15-1 ｜ 3312-2111（代表）FAX 3312-9911（広報課直通） ｜ 区ホームページ：https://www.city.suginami.tokyo.jp/ ｜ 発行：杉並区 ｜ 編集：広報課

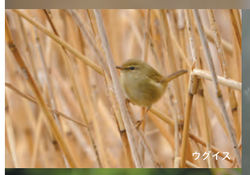
「広報すぎなみ」は月2回（1・15日）発行。新聞折り込みでの配布のほか、区施設・区内各駅などの広報スタンドに置いています。入手が困難な方には個別配布をしています。ご希望の方は、電話・ファクス・Eメール・LoGoフォームからお申し込みください。

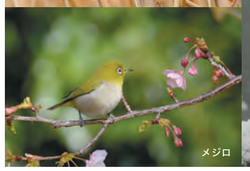
詳細は、区ホームページ（右2次元コード）をご覧ください。

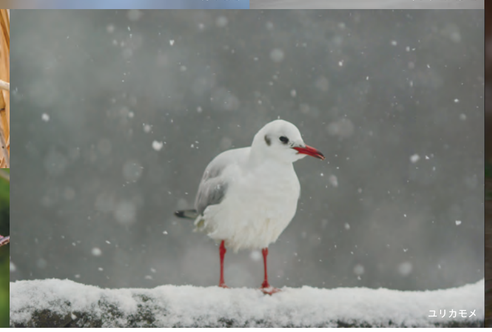

カワセミ


ダイサギ

キンクロハジロ


ウグイス

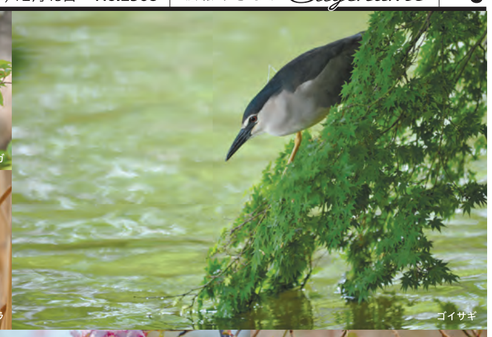

メジロ

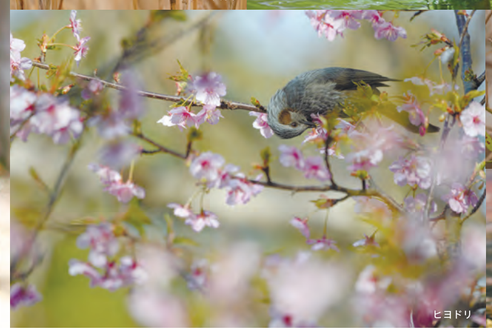

ユリカモメ

西村眞一（にしむら・しんいち）　昭和28年東京都杉並区生まれ。一級左官技能士。ものつくり大学建設学科非常勤講師。東京都左官職組合連合会副会長。日本野鳥の会東京幹事。左官職人としてものつくり大学で指導する傍ら、23歳で日本野鳥の会に入会し野鳥観察を始めてから、野鳥観察の専門家・野鳥写真家として、執筆・講演など多方面から野鳥の魅力を伝え続けている。日本野鳥の会創設者である中西悟堂の研究にも尽力。

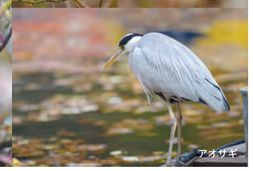
オナガ

シジュウカラ


ゴイサギ


ヒヨドリ

ジョウビタキ


アオサギ

野鳥の写真 © 西村眞一／撮影場所＝善福寺公園

自分たちのまちにすむ、多様な野生生物の存在 を知ってほしい

皇居で見たキジ。野鳥への関心が高まり日本野鳥の会へ

―野鳥に興味を持ったきっかけは何だったのですか？

私は、区内で祖父の代から続く左官業の家に生まれて、家業を継ぎました。20歳くらいのときに皇居で仕事をする機会があったのですが、そのときにたまたま出会ったのが日本の国鳥、キジでした。なんだか心に残る出来事で、その後、野鳥への関心がどんどん高まり、23歳のときに日本野鳥の会に入会しました。そして、入会した翌月に初めて野鳥観察へ。そのときは高尾山での探鳥会に参加したのですが、何も分からない初心者の私に皆さんがいろいろと教えてくれたことを覚えています。それから間もなく宮城県の伊豆沼での雁（がん）の探鳥会にも参加し、夢中になっていきました。

―野鳥観察のどんなところに心をつかまれたのでしょうか？

野鳥そのものに魅せられたのはもちろんですが、野鳥を探しに遠くまで出かけることにも憧れがありました。また、全くの素人から野鳥観察を始めたので、周りの人たちの知識の深さに刺激され「自分もこんなふうに詳しくなりたい」と感じたことも野鳥にハマっていった理由の一つです。仕事の合間に北海道から九州まで、全国各地へ野鳥観察に出かけるようになり、今年で野鳥観察歴は47年になります。

善福寺公園をメインフィールドに各地で野鳥観察

―西村さんは善福寺公園で長く野鳥観察を続けていますね。

善福寺公園での観察も既に40年以上に及びます。善福寺公園はもともと小学校の遠足で来たことがあるくらいで、特になじみがあったわけではないのですが、野鳥観察をするようになってからこの場所の素晴らしさに気付きました。昭和57年には「善福寺公園探鳥会」を発足し、以来、現在に至るまで善福寺公園での野鳥観察を続けています。

―善福寺公園で野鳥観察をしてきて、特に印象深い野鳥は何ですか？

私にとって善福寺公園での野鳥観察における最大の出来事は、平成18年1月にコハクチョウの成鳥5羽・幼鳥1羽が上池に飛んできたことです。コハクチョウはロシアから日本まで約4000kmの距離をおよそ1カ月かけて飛んでくる渡り鳥です。通常は、東京では越冬しないのですが、この年は寒さが厳しくコハクチョウがいつもよりも南下したため、善福寺公園にもやって来たのです。とても貴重な機会だったため、多くの人が観察に訪れました。

―長く観察を続けていると、野鳥や自然の変化も感じるのでしょうか？

当然、時代と共に見られなくなる野鳥もいれば、新たに見られるようになる野鳥もいます。そんな変化も野鳥観察の面白さと言えるかもしれません。1年前に見た野鳥が季節を越えて再び姿を見せると「ああ、今年も無事に来たな」としみじみ思います。遠方まで野鳥観察へ出かけるのも魅力的ですが、自分の生活のすぐそばで野鳥を観察し続けるのもまた楽しいものです。

―西村さんは野鳥写真家としても活躍されています。野鳥を撮るときに大切にしていることは何ですか？

野鳥観察を始めて2年後に写真を撮ることを始めました。カメラのファインダーを通して野鳥と向き合い、その一瞬の美しさを切り取ることは、肉眼で観察するのとはまた異なる味わいがあります。撮影するときには、野鳥に対してできる限りストレスを与えないことを心がけています。驚かせて無理に羽ばたかせるようなことは絶対にしません。満足のいく写真が撮れる日もあれば、撮れない日もある。それでいいのです。

―思い出深い写真、また、今後撮ってみたい写真を教えてください。

45年間で数えきれないほどの野鳥を撮ってきましたが、一度だけ写真を撮りながら泣いたことがあります。それは冬の九州、鹿児島県出水での1枚。元旦に、山の稜線（りょうせん）から初日の出が昇るとともに、越冬のために渡来してきていたマナヅル・ナベヅルが飛び立った瞬間を捉えたときでした。車の中でじっと待機していて、実際にその場面を目の当たりにしたら感動で涙が流れていました。一方、撮ってみたいのはトキ。トキが生息する新潟県の佐渡島へは二度ほど訪れたのですが、野生のトキにはまだ会えていません。一度でいいので写真に収めてみたいと思っています。ちなみに今では、トキは国の特別天然記念物に指定されていますが、江戸時代には阿佐谷周辺にもいたという記録があるんですよ。

野鳥の魅力、身近な自然を伝える取り組みも

―野鳥観察を通して自然の尊さを伝える活動にも取り組んでいらっしゃいますね。

区の野鳥観察会で、子どもから大人までさまざまな人に向けて解説をしたり、「すぎなみ学倶楽部」で区民ライターとして杉並の野鳥の解説記事を書いたり、多方面から野鳥の魅力を伝える活動をしています。少しでも知識を持っているだけで、身近な野鳥たちへのまなざしが変わると思っています。例えばカラス。カラスはどれも同じに見えるかもしれませんが、まちには主に「カァーカァー」と鳴くハシブトガラスと、「ガァーガァー」と鳴くハシボソガラスの2種類がいます。鳴き声がそれぞれ違うと知っているだけで、カラスにも親しみが湧くものです。

―普及活動にも尽力される背景にはどのような思いがあるのでしょうか？

自分たちの暮らすまちでも、野鳥をはじめ多様な野生生物が共に生きているということを、たくさんの人に知ってもらいたいという思いがあります。私は観察会で初めて野鳥観察をする人たちに解説するときは、ポケットから作りものの鳥を出す手品を見せるなど、楽しい思い出になるよう工夫しています。それは、一人でも多くの人に興味を持ってもらいたいから。身近な自然というのは意識しなければなかなか気付きませんが、知る機会を得て少しでも興味が湧けば、それだけで見方が変わってくると思うのです。今、区内の小学生と共に、善福寺川にすむ野鳥の種類・個体数の調査などに取り組んでいます。子どもたちにとっては身近な自然を知る貴重な体験になるのではと思うので、今後も力を入れて取り組んでいきたいです。

＼バードウオッチングに出かけよう！／

バードウオッチングは、季節を問わずに老若男女が楽しめるアウトドアアクティビティーです。区内には、善福寺公園・善福寺川緑地・柏の宮公園・和田堀公園などの自然豊かな公園が充実しているほか、善福寺川、妙正寺川、神田川と水辺も多く、野鳥観察には好環境です。渡り鳥が渡来する冬の季節は、特にたくさんの野鳥を見ることができます。ぜひ身近な公園へ、バードウオッチングに出かけてみませんか？

POINT① 水辺を探そう！

POINT② 双眼鏡を使おう！

POINT③ 野鳥の声を聞こう！

近くの公園で野鳥を見つけよう！

こちらもチェック！

冬に区内で観察できる野鳥

ツグミ（左上写真）／オナガガモ（左下写真）／キンクロハジロ／ウグイス／オカヨシガモ／ジョウビタキ　ほか

「すぎなみ学倶楽部」杉並の野鳥

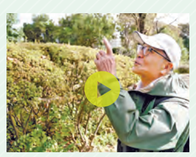
西村さんが、区内で観察できる野鳥55種類を写真付きで紹介・解説しています。

「すぎなみ学倶楽部」杉並の野鳥▲

YouTubeで配信中！

人 すぎなみビト MOVIE

すぎなみビト「西村眞一さん」のインタビュー動画を、右2次元コードからご覧いただけます。



杉並区公式チャンネル

人 すぎなみビト…区内外で活躍する区民などの紹介を通して、地域の魅力を発信していきます（毎月15日号に掲載）。